第二の創世　プリーモ・レーヴィ「ケンタウルス論」をめぐって
〈後編〉

山﨑　彩

1. ケンタウルスのトラーキ

短編小説「ケンタウルス論」は、語り手「私」の回想、あるいは報告書という体裁をとり、全体として三つの部分から構成される。導入部では、ケンタウルス族がカタストロフの後のカオスから生まれたことや、ケンタウルスに関する百科事典的な知識が叙述される。中間部においては、語り手「私」が直接に体験した、ケンタウルスの「トラーキ」との共生、さらにトラーキの恋が語られる。結末部は、トラーキに対する「私」の裏切りと恋に破れたトラーキの狂乱について記される。

小説で最初に語られるケンタウルスの創世神話、カタストロフの後に起きた「第二の創世」については、先の稿（山崎 , 2021）で考察したので、ここからは中間部のケンタウルスのトラーキの物語と、結末部分について検討するが、この小説では「生殖」あるいは「創造」が全体を貫くテーマとなっていて、冒頭のケンタウルスの創世神話が基本のモチーフとなり、その後の物語は、このモチーフがさまざまに展開されてゆくことになる。

さて、神なき世界の混沌から生まれた新しい生き物ケンタウルス族は、両親の異なる性質の良いところを併せ持った「気高く強い子孫 progenie nobile e forte」とされる。

> 彼らは最初から、人間と馬の最高の性質を保った、気高く強い子孫だった。賢く勇敢で、寛大で機知に富み、狩りや歌、戦争や星の観察にも長けていた。どちらかといえば、もっとも幸運な婚姻において起きるように、それぞれの両親の良いところがその血の中に発揮されているようだった。というのも、彼らは、少なくとも最初の世代には、走ることにかけてはテッサリアの母馬よりも力強く速かったし、黒いハムや他の人間の父親よりもはるかに賢く、洞察力に優れていたからだ。（*Opere*, I: 597）

物語の主人公、ケンタウルスの「トラーキ」は「気高く強い」血統を受け継いでいる。彼は、人間とは異なる種でありながら、人間と友情を育む良き隣人として存在する。語り手は、トラーキが「かなり容易に我々の言葉を習得していた」（*Opere*, I: 595）、また、「私たちは長いこと一緒に暮らした。ある意味では、私たちは一緒に成長したとも言える」（*Opere*, I: 599）と述べる。ただし、人間と異なる点が一点だけあり、それはケンタウルスが、「生殖 procreazione」に対して敏感に反応することである。

彼（トラーキ）が言うには、すべてのケンタウロスはこんな風にできている。つまり、動物、人間、植物のすべての発生を、喜びの波のように血を通して感じるのだ。また、自分の周辺で起こるすべての欲望や性交を、心の奥底で、震えるような緊張に満ちた不安として感じ取る。そのため習慣的に禁欲生活を送っているかかわらず、愛の季節には非常に落ち着きのない状態になるのだ。（*Opere*, I: 599）

その理由は、実はもう少し前で既に述べられている。ケンタウルスの性質についての非人称的な語りの中で、突然、「私 io」が主語の文が現れ、その中で、ケンタウルスたちの「大いなる生命力 vitalità grande」について、「彼らの中に脈々と受け継がれているのは…衝動と禁止による懊悩から生まれた盲目的な情熱」であると語られる箇所がある。

あるいはもしかすると、それ［長寿］は、彼ら［ケンタウルス］の大いなる生命力が時間に投影されているだけかもしれない。私もこちらを固く信じている（そのことは私が語ろうとする物語が証明するだろう）。つまり、彼らの中に脈々と受け継がれているのは、馬の草食動物的な活力ではなく、むしろ、衝動と禁止による懊悩から生まれた盲目的な情熱、彼らが宿されたときの人間と獣の絶頂の瞬間だと私は思うのだ。（*Opere*, I: 597）

大洪水というカタストロフの過ぎ去った後に、混沌から生じた「第二の創世」。そこでは人間とテッサリアの雌馬との「歯止めのきかない情交 amori sfrenati」（*Opere*, I: 597）によってケンタウルスが誕生する。ここで、語り手は、その情熱が後世のケンタウルスたちの中に脈々と宿っているのだと主張する。これが伏線となり、この後、トラーキ自身が恋に落ちると、このケンタウルスの内部において、理性と情熱の激しい葛藤、さらには失恋の痛手による狂乱が起きる様子が描かれる。

2. トラーキの恋

Pianzola（2017: 319）は、この小説の独創的な点として、「主人公であるケンタウルスの会話や考えが報告されていることで、それが挿入されている部分において、読者はケンタウロスの性質のいくつかの詳細について情報を得ることができ、さらに彼らが経験する内面的な葛藤を観察することができる」と述べているが、トラーキの内面の葛藤は、まずトラーキが語り手の「私」に語ったこととして、以下のように直接話法で記述される。

彼［トラーキ］は私にこのように語った。「親愛なる君よ、私の時が来た。私は恋に落ちた。あの人が私の中に入ってきて、私を支配している。私は彼女の姿を見たい、声を聞きたい、もしかしたら触れてもみたいと願い、そればかり望んでいるのだ。つまり、与えられないものを欲しがっているのだ。私はそこに集中している。私の中にこの望みより他のものはない。私は変化している、変化してしまった、私は別のものになった。」（*Opere*, I: 601）

トラーキは、自らの恋を、ダンテもその仲間であった清新体派 Dolce Stil Novo の詩人たちが書い

ていたように捉えている。清新体派の恋愛詩においては、「貴婦人の笑みを湛えた目から発せられる輝く眼光は、精気の燃え上がる光線からなり、それが見る者の目を貫き、心臓まで突き進む」（ヴァレンシー、1995: 318）。そして、「進入した精気は、生命体全体の秩序を乱すことができる」（ヴァレンシー、1995: 318）。つまり、恋は、外部からやってくるある種の攻撃の結果として存在するのだが、トラーキもまた、同様の攻撃と、その結果としての支配を受けていると感じている。

> 彼［トラーキ］は、私にほかのことも語った。それを躊躇しながら記すのは、私が肝心な点を理解できていないだろうと思うからだ。前日の夜から、彼は自分が「戦場」になったと感じていたこと、それまではわからなかった衝動的な祖先、ネッソスやポロスの行為をこと、自分の人間としての半身は、夢で、気高く雅やかで役に立たない空想で満たされていること。彼は大胆な企てを実行し、自分の腕力で正義を行うことを望むのだった。もっとも深い森を自分の勢いにまかせて突破し、走って世界の最果てに到達し、新しい土地を発見して征服して、そこに実りある文明を築くこと。このすべてを、どういうわけか彼自身にもよくわからないのだが、彼はテレーザ・デ・シモーネの目の前でおこないたいのだった。彼女のために成し遂げ、彼女に捧げたいのだった。だが、結局、彼は自分の夢の虚しさを、夢見ている最中から分かっていた。そして、これこそが、前夜の歌の内容だった。その歌を、彼はコロポンで過ごした遠い昔の少年時代に覚えたのだが、そのときまで理解したこともなければ歌ったこともなかった。（*Opere*, I: 601. 下線は引用者）

トラーキは自らのうちに熱情があることを理解しているが、その実体は「どういうわけか彼自身にもよくわからない in qualche modo a se stesso oscuro」。しかし、読者はトラーキの状況がよりはっきりと理解できるはずだ。「衝動的な祖先、ネッソスやポロス」への言及によってダンテの『地獄篇』第十二歌が呼び出されるからである[1]。作者ダンテは、ケイローン、ネッソス、ポロスの名を挙げて、ケンタウルス族に対するふたつの相反したイメージを読者に喚起している。次の引用は、第十二歌のうちの、地獄を歩き回る不審者ダンテとウェルギリウスを尋問するネッソスに、ウェルギリウスが返答する場面である。

> 我が師は言った。「我々はそちらでケイローンに返答しよう。抑えのきかないおまえの欲望は害をなした。」そして私に軽く触れると言った。「あれがネッソス。美しいデーイナネイラのために死んだが、彼自身が自分の復讐を果たした。そして、あの真ん中にいて自分の胸を見ているのが、偉大なケイローン。アキレウスを育てた。もう一人は、怒りに満ちていたポロスだ。」（Alighieri: *Inferno*, XII, vv. 64-72）

[1] ケンタウルスは、暴力によって他者を害した人間（僭主と略奪者）を罰する地獄の番人として登場する。罪人たちは、沸き立つ血の川の中で茹でられている。熱さから逃れるために池から体を出そうとすると、ケンタウルスに矢で射られる。ケンタウルスは、これらの僭主や略奪者たちの傭兵として乱暴狼藉を働いていた騎馬兵のイメージでもある。

賢く思慮深いケイローン、それに対して、感情が激しやすく衝動的なネッソスとポロス。恋に落ちる前には、理性的な性質に支配され、ケイローンに類していたトラーキは、恋に落ちた後に、それまで知らなかった衝動的な性質、ネッソスやポロスの性質を自らのうちに発見する。後者の性質は、それまでは存在しないも同然のものだった。しかし、恋をきっかけとして、「彼自身にもなにかよくわからない」ものとして彼の心の中で荒れ狂う。

3. 裏切りの物語

トラーキの葛藤、彼の中で荒れ狂う嵐は、しかし、トラーキの内面にとどまり、表に出ることはない。それを解き放ったのは、こともあろう、語り手の「私」である。

> 数週間のあいだ、それ以外は何も起きなかった。デ・シモーネ家の人々とはときどき会ったが、トラーキの態度からは、彼をかき乱している嵐については何も見てとることはできなかった。それを解き放ったのは、他の誰でもない、私だった。（*Opere*, I: 601）

語り手は説明する。ある日、トラーキが蹄鉄を直すために蹄鉄工のところへ行った間に、「私」とテレーザはふたりきりで森に散歩に出かけた。森の深くまで歩いて行った。そして「テレーザはどんな疑念をも消し去るようなやり方で私に身を寄せた。私たちが戻ったのは夜だった」（*Opere*, I: 601）。この時に何が起きたのか。「私」はこれ以上語らない。だが、以下のような弁明によって、読者に誤解の余地を与えない。

> 私はすぐに、いや、すでに行為の最中からまずいことをしたと気づいた。そして、今でも後悔している。だが、私の罪がすべてではない。テレーザの罪でもない。私たちの間にトラーキがいたのだ。つまり、私たちは彼のオーラにとっぷりと浸り、彼の磁界に引きつけられていたのだ。私はそれを知っているのは、私自身が、彼が通過した場所で、季節外れの花が開き、その花粉が、彼が走るときに引き起こす風に乗って飛ぶのを見たからだ。（*Opere*, I: 602-3）

「私」は「まずいことをした aver male operato」のを自覚し、「後悔している」と言いながら、自分の罪も、テレーザの罪も認めていない。そして、「私たちの罪」の原因が、トラーキにあったと述べるに至る。トラーキには悪いことをしたが、悪いことをされたトラーキこそがその原因だ、というのである。

「私」の裏切りを察知したトラーキは、狂乱状態となる。今やトラーキは「ネッソスやポロス」的性質に完全に支配された状態である。

> 彼は家へも、デ・シモーネ家の農場へも向かわなかった。キアパッソ農園を取り囲む二メートルの高さの柵を軽々と跳び越えると、盲目的な怒りにまかせてまっすぐ突き進み、ぶどうの木々を支柱ごとなぎ倒し、若い枝を支えている頑丈な鉄線を引きちぎりながら、ぶどう畑を横切ったのだ。（*Opere*, I: 602-3）

彼は麦打ち場にたどり着いたが、家畜小屋の扉が外から掛け金で閉められているのを目にした。手を使えば容易に開けることができたはずだ。だが、彼は五十キロもある小麦用の挽き臼を拾うと、それを扉に向かって投げつけて、扉を粉々に破壊した。（*Opere*, I: 603）

上記引用の少し前に、語り手は、怒り狂うケンタウルスのことを「狂乱のトラーキ Trachi furioso」（*Opere*, I: 602）と呼んでいるが、この言葉が示すように、トラーキの怒り狂った状態は、失恋した英雄が怒りと悲しみから狂乱に陥り、前代未聞の大暴れをするアリオスト『狂乱のオルランド *Orlando furioso*』における描写のパロディでもある（Cfr. Ariosto: Canto 23-24）[2]。だが、狂乱したオルランドが木を引き抜いたり、羊飼いを引き裂いたり破壊的な行為に終始したのに対して、狂乱のトラーキが雌馬を襲った場所においては、八ヶ月後に、元気な普通の子馬が生まれるのであった。トラーキは破壊行為ではなく、暴力的な創造行為をおこないながら去って行く。また、狂乱のオルランドが、完全に英雄としての自分を失ってしまい、仲間が彼の正気を探しに月まで行かなければならなかったのとは対照的に、ケンタウルスのトラーキは、彼自身はそれまで知らなかった性格、ネッソスやポロスに代表される衝動的な暴れ者としての側面を完全に再獲得した、すなわち、ある意味では自分を取り戻した状態なのである。

トラーキに関する最後の目撃情報は、プーリアの漁師がコルフ沖で「イルカにまたがる男」（*Opere*, I: 604）を見た、というものである。その不思議な男は、「東へ向かって力強く泳いでいた」（*Opere*, I: 604）が、船員に声を掛けられると、海中へ潜り、視界から消える。

4.　結論

レーヴィは、アウシュヴィッツからの帰還の旅を描いた『休戦』において、囚人たちが次々に命を落とした収容所最後の日々から語りはじめた。しかし、終戦直後の混沌とした状況を、ダンテ『地獄篇』第十二歌を引用しながら描いた後は、『休戦』は不思議な明るさをもった物語となる。にもかかわらず、結末においては、このような混沌の中から新たな人生が再び創り出されるというその希望は「ラーゲル」という悪夢の再来によってかき消された。

レーヴィは、ほぼ同時期に執筆した「ケンタウルス論」においても、ダンテ『地獄篇』第十二歌を利用した。この短編小説においては、大洪水というカタストロフの後の混沌状態の世界において、異なる種が交わって「第二の創世」がおこなわれ、その時にケンタウルスという種族が誕生したのだとされる。彼らは、両親の異なる性質の良いところをあわせ持った「気高く強い子孫 progenie nobile e forte」と呼ばれる。

「ケンタウルス論」の主人公トラーキは、ケイローンのような理性的なケンタウルスであり、遠い異国から連れてこられたにもかかわらず、北イタリアの地になじみ、言葉も覚え、長い間、人間ではないが人間の仲間として認知されていた。ところが、恋に落ちたことで、事態は変化す

[2] そもそも『狂乱のオルランド』自体が『ロランの歌 *la Chanson de Roland*』を受け継いだ作品なのだが、レーヴィはこのように芋づる式に過去の文学作品が呼び出される方法を好んだようだ。短編集『博物誌』のエピグラフには、ラブレーの『ガルガンチュア』第六章からの引用が付されているが、そこには、ガルガンチュアの出生が、プリニウスの『博物誌』第三章のパロディであることが仄めかされている。

る。「恋に落ちる」というのは、トラーキによれば、外部からのある種の攻撃を受け、その攻撃に打ち負かされることによって体内に激しい動揺が起きた状態である。これによって、トラーキは、それまでに気づいていなかった、もうひとつの生まれつきの性質、ネッソスやポロスといったケンタウルスに代表される情熱的で無思慮な性質を自らのうちに見いだす。だが、トラーキは人間の「私」に裏切られる。裏切った「私」は罪を認めながらも、その原因はトラーキにもあると明言する。怒りと悲しみの中で狂乱するトラーキはイタリアを去る。だが、トラーキはただ立ち去るのではない。あちこちで、雌馬を孕ませ、八ヶ月後には元気な子馬が生まれるのだった。

このように見てみると、『休戦』において最初と最後に死のイメージが現れたのと対照的に、「ケンタウルス論」では最初と最後に「誕生」のイメージが置かれている。この寓話的な小説にどのような解釈を与えることが出来るだろうか。筆者は、三つの解釈が可能であると考えた。

4. 1 「ケンタウルス論」の解釈・その 1

第一の解釈は、「ケンタウルス」が、作者レーヴィを指しているとする。実際、ケンタウルスのトラーキの物語は、作者の伝記的事実と重なるところがある。例えば、トラーキがケンタウルスでありながら「人間」と同化していたという状況は、レーヴィ自身がほかの多くのユダヤ人と同じようにイタリア人にほぼ同化していたことを思い出させる。

また、彼が実際になにかを書くようになったきっかけは、アウシュヴィッツ強制収容所における過酷な体験であった。2017 年に出たレーヴィの全集に付された解説によると、レーヴィは 1945 年 10 月にトリノに帰還した後、1945 年の年末から 1946 年にかけていくつかの詩、報告書、あるいは後に『これが人間か』の一部となるエピソード[3] を書いている。書くという作業自体は、『これが人間か』の中にも描かれているように（*Opera*, I: 108）、強制収容所にいたときから始めていたようである（*Opera*, I: 1451-2）。解説の Belpoliti は、「元囚人［レーヴィ］は書くことによって、アウシュヴィッツで体内に注入された毒を排除する必要性を感じていた」（*Opera*, I: 1450）と述べているが、「ケンタウルス論」において、恋に落ちたトラーキが「あの人が私の中に入ってきて、私を支配している」と述べていたこと、そしてその恋の苦しみの中で自分の中にそれまではなかった性質を自分の中に見いだしたことは、強制収容所における苦しみの中で「書くこと」を見いだした作者レーヴィとも重なる。ただし、そのきっかけが、「ケンタウルス論」のトラーキは恋で、作者レーヴィはアウシュヴィッツ強制収容所という大きな違いはあるのだが。

レーヴィは 1946 年 1 月には化学者として塗料製造会社に職を得ているが、仕事の合間に、アウシュヴィッツについての証言を書き続ける。これらの挿話をひとつにまとめて『これが人間か』というタイトルをつけ、エイナウディの編集の仕事をしていた知人のナタリア・ギンズブルクに託す。しかし、出版は拒絶される。エイナウディからの拒否は、レーヴィにとっては打ちのめされるような出来事であったと伝記作者も述べている（Thomson, 201: 338-9）[4]。結局、最初の小説は 1947 年に別の出版社から出版されることになる。だが、レーヴィはエイナウディからの出版を諦めきれず、1950 年代初頭に再び編集者（今度はギンズブルグではなく、後に自分でも

[3] “Storia di dieci giorni” のこと。タイプ原稿には「1946 年 2 月」とあるという。

出版社を起こすパオロ・ボリンギエーリ）に打診していたようである（*Opere*, I: 1476）。大幅な加筆と修正を施した『これが人間か』が 1958 年についにエイナウディから出版されると、それによって注目を浴び、執筆活動がさらに活発になった。『休戦』を書いていた頃のレーヴィは、他にも短篇小説を次々に発表していた。

そのように考えると、トラーキの中で相争う、賢者「ケイローン」と衝動的な「ネッソスやポロス」の性質は、作者レーヴィの中で相克する「化学者」と「書き手」というふたつの性質なのであり、ケンタウルスのトラーキの物語は、実は作者レーヴィの内的な世界を表していると言えるのではないか。

レーヴィは 1966 年の有名なインタビューで「私はケンタウルスだ」と述べた。

> 私は両生類であり、ケンタウロスです。ケンタウロスについての短篇小説も書いたことがあります。サイエンス・フィクションの両義性は、私の現在の運命を反映しているように思えます。私はふたつの半身に分かれています。私の半分は工場に属していて、私は技術者で化学者です。残りの半分は、前者とは全く切り離された状態で、執筆やインタビューへの回答、自分の過去と現在の経験に関する作業を行っています。（*Opere*, III: 17-18）[5]

さらに、より興味深いのは、『休戦』を出版した直後の 1963 年のインタビュー[6] である。

> いいですか、本当のところ、現在の私はたぶん化学者の仕事よりも書くことの方を楽しんでいます。でも、密かに育まれるべきもうひとつの夢は、連結部分 punto di congiungimento を見つけることではないでしょうか。続けさせてください。つまり、科学的な探求の意味を人々に伝えたいのです。実験室の閉鎖空間の中で起こっていることに関する空想的な資料、とはいえ過度に空想的ではないのですが。それはつまり、人間のもっとも古く、もっとも神秘的な感情、バッファローを殺すか殺さないか、探しているものを見つけるか見つけないかという不確実性の瞬間を、現代的な形で再現することです。鉱山労働者や医師、娼婦の人生を描いた物語の伝統はありますが、化学者の精神的な冒険 avventure spirituali di un chimico を描いたものはほとんどありません。（*Opere*, III: 11）

ここで述べられている「化学者の精神的な冒険」は、1975 年の『周期律 *Il sistema periodico*』と

---

[4] レーヴィは個人的にも親しくしていたナタリア・ギンズブルクに原稿を託した。すでに小説家としてデビューしていたギンズブルクは、当時、エイナウディの編集主幹チェーザレ・パヴェーゼの助手を務めていた。原稿はわずか一週間後に突き返される。その理由は、「エイナウディのカタログには“合わない”」というものだった。1985 年、ギンズブルクは、インタビューの中で過去の「過ち」について以下のように述べている。「プリーモにとっては辛い時期だったかもしれませんね。でも、当時、私は若くて思慮も足りませんでした。それに、あの本を却下したのは、私だけの責任ではありません」(Thomson: 339)。

[5] E. Fadini, “Primo Levi si sente scrittore «dimezzato»”, in «l’Unità», 4 gennaio 1966.

[6] P. M. Paoletti, “Sono un chimico scrittore per caso”, in «Il Giorno», 7 agosto 1963.

いう自伝的作品を予告する言葉と解釈される（Cfr. Belpoliti, 1997: XIII）。だが、帰国直後、アウシュヴィッツ強制収容所についての報告書を書いている時に、短篇小説「ムネマゴギー（記憶喚起材）I mnemagoghi」も書き、「証言」する自分の精神的な冒険を語ったのとちょうど同じように、アウシュヴィッツについての新たな「証言」、すなわち『休戦』を執筆する一方で、作者レーヴィは「執筆」する自分、アウシュヴィッツというカタストロフの後の自分の「精神的な冒険」を、「ケンタウルス論」というファンタジーに託し、何重にも繭に包んだ形で語っていると解釈することもできる。

4. 2 「ケンタウルス論」の解釈・その２

第二の解釈は、「ケンタウルス」とはイタリアのユダヤ人（その中にレーヴィも含まれる）を指し、この物語は彼らが第二次世界大戦中に経験したこと――イタリアの社会に同化して暮らしてきたユダヤ人たちが、1938 年の人種法、その後のユダヤ人のアウシュヴィッツ移送によって、さらに戦後はイタリア政府による事実の隠匿によって、イタリア人たちの「裏切り」を経験する――を象徴的に描いたものだというものである。この解釈を提案した Benduce は「レーヴィはケンタウロスの幻想的なイメージを通して、ユダヤ系イタリア人社会に浸透した複数の裏切りの感覚を痛切に伝えることができた」（Benduce, 2009: 27）と述べている。

「ケンタウルス論」は全体として寓話的な物語ではあるが、Calcagno（2000: 171）は、ケンタウルスのトラーキに蹄鉄をつけていた職人が呟く言葉“difisiôs”（*Opere*, I: 602. 原文ママ）が、レーヴィが住んでいた町トリノとその周辺部の方言であると指摘し、この小説がトリノの周辺部を舞台としていると述べた。Calcagno の指摘が正しければ“difisiôs”という言葉は、物語の舞台が作者レーヴィに非常に近い場所に設定されていることを明らかにする。と同時に、この小説が単なる寓話にはとどまらない可能性を、つまり、この小説をより具体的なできごとをほのめかした物語として読んでもよいということを示唆している。すると、「人間」にほぼ同化して暮らしてきたにもかかわらず、最終的に「人間」に裏切られる「ケンタウルス」、これはイタリアのユダヤ人のことであるという Benduce の解釈は間違っていないように思える。

Benduce はユダヤ人たちがいかにイタリアの社会に同化していたかということを主に二次資料を用いて証明したが、彼が参照していないレーヴィの証言集（Poli e Calcagno, 1992）[7] の中に、解釈の補強証拠となるものがあるので、ここで引用したい。1975 年のインタビュー[8] においては、レーヴィは「アウシュヴィッツでユダヤ人になった」と述べて、アウシュヴィッツの体験によって、自分の出自に向き合うことになったと証言している。

> 私はアウシュヴィッツでユダヤ人になりました。自分がユダヤ人だとそれ以前には感じていませんでした。自分を「異質だ」と思う意識を強要されました。誰かが、まったく理由もなく、私が異質で劣っていると決めたのです。自然な反応として、あの時代、私は自分が異なっていて崇高だと感じていました。でも、今ではどうでも良いことです。その意味で、アウシュ

[7] この資料は Benduce の論文には引用されていない。

[8] G. De Rienzo, “In un alambicco quanta poesia”, «Famiglia Cristiana», 20 luglio 1975.

ヴィッツは私に何かをくれました。それはまだ残っています。アウシュヴィッツは、私にユダヤ人だと感じさせることによって、後に、それ以前は持っていなかった文化的な遺産を取り戻すように急き立てたのです。（Poli, 1992: 281. 下線は引用者）

1938 年の「人種法」の施行による、ユダヤ人の公職追放（後に私企業もユダヤ人を雇用できなくなる）、ユダヤ人の子どもの公立学校からの追放、また、その後のユダヤ人のアウシュヴィッツへの移送といった事態が起きるまで、裕福なユダヤ人家庭に育った作者レーヴィにとって「ユダヤ人であること」は、特に意識するようなことではなかったと理解してよいだろう。この証言は、ケンタウルスのトラーキが、自分のもうひとつの性質に自覚がなかったことと重なる。また、当時レーヴィが感じたという「異なっていて崇高だ diverso e superiore」という感覚は、「ケンタウルス論」における、人間と馬のあいだにうまれた「気高く強い nobile e forte」な子孫としてのケンタウルスを形容する言葉と響き合う。

さらに、晩年の 1982 年にレーヴィが講演のために用意した原稿[9] においては、「ユダヤ人」と「作家」というふたつのアイデンティティを獲得するまでの過程が、よりわかりやすい形で説明されている。

イタリアにおいて、外国ではよりはっきりとした形で、私は今では「ユダヤ人作家」とみなされています。私はこの善意による肩書きを受け入れましたが、しかし、即座にというわけではなく、抵抗感がなかったわけでもありません。実際のところ、完全にこの肩書きを受け入れることができたのはかなり年をとってからでした。私がユダヤ人という身分を受け入れたのは、1938 年、19 歳だったときに施行された人種法と、1944 年、アウシュヴィッツへの流刑の結果でした。私が作家という身分を受け入れたのは、もっと遅く、45 才より後でした。その時、私はすでに二冊の本を出版していましたし、書くという仕事（しかしこれが本当の職業であると考えたことは一度もありませんが）が、化学者という私の最初の仕事を凌駕し始めていました。私はふたつの段階を踏まなければならなかったのですが、それは、意図的かつ自覚的な選択というよりは、巡り合わせの結果でした。[...] イタリアに古くからいるユダヤ人の子孫の大多数と同じように、私の両親や私の祖父母はブルジョワ階級に属し、言語、習慣から道徳的な方向性まで、すっかりイタリアに同化していました。（Poli, 1992: 283-4）

「ケンタウルス論」におけるケンタウルスのトラーキの物語は、作者のレーヴィが人生を歩んでいくうちに「巡り合わせ destino」によって「ユダヤ人」と「作家」という、新たなアイデンティティを獲得してゆく物語にも重なってくるだろう。ただし、この「巡り合わせ」という言葉が内包しているのは、人種法であり、アウシュヴィッツ強制収容所であり、終戦後、イタリアのレジスタンス活動を語るネオレアリズモ小説は積極的に出版する一方で、1947 年にレーヴィの本の出版を拒絶したエイナウディ社である。すべて、イタリア人に「裏切られた」経験であることは

[9] この文章は、ロックフェラー財団が主催したベッラージョでの講演のために、1982 年 9 月 12 日に作者によって準備された（Cfr. Poli, 1992: 283）。

忘れてはならない。「ケンタウルス論」においては、トラーキにそれまで隠されていた新しいアイデンティティが完全に、かつ暴力的に表出するのは、語り手の「私」の裏切りの後のことだ。

「ケンタウルス論」は、第二次世界大戦中にイタリアのユダヤ人たちの身に起きたことを、客観的な歴史的な事実を述べるのではなく、彼らがどのように感じたかということに焦点を当て、裏切られた衝撃と悲しみを、荒れ狂う一頭のケンタウルスとして描いていると読むこともできる。

4. 3 「ケンタウルス論」の解釈・その３

第一、第二の解釈を拡大し、この小説をレーヴィ個人、あるいはイタリアのユダヤ人の物語としては捉えずに、人間に普遍的な物語として捉えることもできるだろう。レーヴィがこの物語を自らの「証言」や「回想」として書かず、ケンタウルスという想像上の生物を導入して幻想小説に仕立てたのは、おそらく、この物語をより普遍的な倫理的な問題提起として読者に読ませたいという意図もあったことは間違いない。つまり、「ケンタウルス論」は、未来を志向する物語として読むこともできる。

この場合「ケンタウルス」とは、少数派にならざるをえないすべての人々を指すだろう。ケンタウルスを裏切る「私」や「テレーザ」は、社会における多数派に属する。この小説は、明らかな力関係の中で、常に力を握っている多数派がいかに少数派を裏切り、蹂躙する可能性があるということを告発した物語としても読める。その時、いかに「気高く強い」ケンタウルスであろうとも、退却という手段しか残されない。しかし、「ケンタウルス論」は、そのように敗走するケンタウルスを決して否定的に捉えてはいない。小説冒頭の「第二の創世」の伝説において、災禍の後、愛と混沌の中、再生の歓喜と共に異種混交が起きてケンタウルスが生まれたと書かれたときから、この小説においてケンタウルスは常に肯定すべきものとしてある。敗走するにしても、それもまた悪いことではない。トラーキのように、誇り高く力強く堂々と逃げ去れば良い。敵の視界から消えるまで。「ケンタウルス論」の締めくくりは以下のようだ。

> プーリアの漁船の乗組員が報道陣に話した好奇心をかき立てるエピソードは、この話と無関係ではないはずだ。コルフ沖で、「イルカに乗った人間」を見たというのだ。この不思議な光景は、東に向かって力強く泳いでいた。漁船員たちが声を掛けると、男と灰色の背中は海の中に沈み、視界から消えたという。（*Opere*, I: 604）

イルカに乗った人間という「不思議な光景 strana apparizione」は、最後は波間へと消えてゆく。そこには、「ケンタウルス」――小説を一度拒絶された過去の自分であり、ユダヤ系であるという理由で死の淵を見た（死の淵に沈んでしまった）イタリアの人々であり、また、これから先、マイノリティであるがために苦しむことになる人々――に対して注がれる、プリーモ・レーヴィの同胞愛に満ちた眼差しが、間違いなくある。

参考文献

テクスト

Opere, I ＝ Levi, Primo, *Opere complete I*, a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino, 2016.
Opere, III ＝ Levi, Primo, *Opere complete III*, a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino, 2016.

引用文献

Alighieri, Dante（2001）, *Commedia,* con il commento di Anna Maria Chiavacci Leonardi, Zanichelli, Bologna.
Ariosto, Ludovico（2015）, *Orlando furioso*, a c. di Lanfranco Caretti, Einaudi, Torino.
Belpoliti, Marco（1997）, "Io sono un centauro", Introduzione a Primo Levi, *Conversazioni e interviste 1963-1987*, a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino, VII-XIX.
Benduce, Felice Italo（2009）, "Io sono un centauro: Betrayal in Primo Levi's *Quaestio de Centauris*", «Nemla Italian Studies», 32（2009-2010）, 27-61.
Calcagno, Giorgio（2000）, "Dante dolcissimo padre", in Aa.Vv. *Al di qua del bene e del male*, a c. di Enrico Mattioda, Franco Angeli, Milano, 167-174.
Levi, Primo（1958）, *Se questo è un uomo*, Einaudi, Torino. 竹山博英訳『【改訂完全版】アウシュヴィッツは終わらない これが人間か』朝日新聞出版，2017 年.
Levi, Primo（1963）, *La tregua*, Einaudi, Torino. 竹山博英訳『休戦』岩波文庫，2010 年.
Levi, Primo（1966）, *Storie naturali*, Einaudi, Torino. 関口英子訳『天使の蝶』光文社古典新訳文庫，2008 年.
Levi, Primo（1975）, *Il sistema periodico*, Einaudi, Torino. 竹山博英訳『周期律』工作舎，1992 年.
Levi, Primo（1997）, *Conversazioni e interviste 1963-1987*, a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino. 多木陽介訳『プリーモ・レーヴィは語る : 言葉・記憶・希望』青土社，2002 年.
Pianzola, Federico（2017）, *«Le trappole morali'» di Primo Levi: Miti e* fiction, Ledizioni, Milano.
Poli, Gabriella e Calcagno, Giorgio（1992）, *Echi di una voce perduta. Incontri, interviste e conversazioni con Primo Levi*, Mursia, Milano. 二宮大輔訳『プリーモ・レーヴィ――失われた声の残響』水声社，2018 年.
Thomson, Ian（2017）, *Primo Levi: Una vita*, tr. it. di Eleonora Gallitelli, UTET, Milano.
竹山博英（2011）,『プリーモ・レーヴィ: アウシュヴィッツを考え抜いた作家』言叢社.
ヴァレンシー，モーリス（1995）『恋愛礼讃　中世／ルネサンスにおける愛の形』沓掛良彦／川端康雄訳，法政大学出版局.
山﨑彩（2021）,「第二の創世 : プリーモ・レーヴィ「ケンタウルス論」をめぐって〈前編〉」『言語・情報・テクスト』28, 37-46.